

論文の概要及び審査結果の要旨

氏名	藤澤盛樹
学位の種類	博士（教育学）
学位記番号	甲第22号
学位授与の要件	大阪総合保育大学学位規程第12条
学位授与の日付	令和3年3月21日
学位論文題目	小児救急医療におけるトリアージスキルを活用した子育て支援促進モデルの考案
論文審査委員	主査 小椋たみ子（大阪総合保育大学教授・博士（文学）） 副査 大方美香（大阪総合保育大学教授・博士（教育学）） 副査 桑田弘美（滋賀医科大学教授・博士（医学））

〔1〕 論文の概要

日本における小児人口の割合は年々減少し、児童虐待対応件数の増加、待機児童問題、子どもの貧困率の増加、子育ての社会的孤立、育児ストレスなどの子育てに関する諸問題が山積している。日本における子育て支援に関する課題は解決に貢献すべき喫緊のものとして捉えられている。子育て支援は様々な場や機関で行われ、また、子育て支援にかかわる職種は保育士・幼稚園教諭、保健師・助産師、心理士、医師、社会福祉士をはじめとし、多様な人がかかわっている。本研究は、小児看護分野の中の小児救急看護の立場から子育て支援にアプローチする。

論者は2001年より看護師として小児看護に従事し、2008年からは小児救急看護学を学び、小児救急医療機関での職務の中で、子どもの急変を予見し、的確なトリアージスキルを実践することが、トリアージ後の医療へと円滑につながることに、さらに、トリアージスキルの活用が、多くの子どもの安全や親の安心感の高まりに貢献できるようになる可能性を認識し、本研究の着想に至った。本研究では、トリアージスキルを明確にし、トリアージスキルから小児救急医療における子育て支援の基盤を示し、トリアージスキルを活かした小児救急医療で実践可能な子育て支援促進モデルの考案を行うための基礎資料を収集し、分析し、方向性を示した。

本論文は以下の6つの章で構成されている。

序章 問題の所在と本論文の構成

第1章 小児救急医療におけるトリアージ

第1節 小児救急看護の歴史と役割

第2節	小児救急トリアージの概説
第3節	小児救急トリアージにおける看護研究動向
第2章	小児救急トリアージスキル
第1節	小児救急トリアージスキルの特徴
第2節	小児救急トリアージスキルにおける看護師の認識
第3節	小児救急トリアージスキルにおける看護師の実践
第3章	小児看護における子育て支援の動向
	—小児救急医療における子育て支援への示唆—
第4章	小児救急医療における子育て支援促進モデルの検討
第1節	問題の所在と研究目的
第2節	小児救急医療における子育て支援の実態と子育て支援促進への展望
第3節	子育て支援に関わる保育者が捉える小児救急医療における子育て支援
第4節	小児救急医療における子育て支援促進モデル案の作成と検討
終章	総括と今後の課題

序章では、日本の子育てに関連する施策、制度やデータから現代の子育て支援に関する課題が日本における重要な課題であることを認識し、「子育て支援」の定義と概念の変遷、現代の子育て支援の多様性を述べた。そのうえで、子どもと親の居るあらゆる場や機関に様々な観点で、子育て支援の基盤が敷かれるようになっていることに言及した。一方で、就学前の多くの子どもが救急医療を受け、救急医療における子育て支援は必要とされながら根付いていないため、小児救急医療における子育て支援促進の必要性を問題提起した。

第1章では、本論文の背景でありキーワードとなる小児救急トリアージに関して、小児救急看護の歴史と役割から振り返り、小児救急トリアージが必要となった経緯を整理し、小児救急トリアージの意義を述べた。また小児救急トリアージの研究に視点を置き、国内外の先行研究の動向を概観した。その結果、小児救急トリアージの看護に関する研究は少なく、商業雑誌などでの実践報告は散見されるが、トリアージスキル、思考プロセスなどを調査、研究されたものはなく、小児救急トリアージにおける実践の具体的内容を明らかにすることの必要性を提起した。

第2章では、本論文の一つ目の骨子である小児救急トリアージスキルの明確化を行った。第1節では、0歳児8名、幼児期18名、学童期9名、合計35名の小児救急トリアージ場面に参加観察し、その後、研究協力看護師を対象にトリアージ場面での看護実践の意図をインタビュー調査し、質的な分析を行った。小児救急場面における看護師のトリアージスキルの特徴として、【子どもの外観を重視】【感染症を考慮して隔離要否を判断】【脱水の程度を見極め】【子どもの苦痛と緊張を緩和】【年齢に合わせて症状を直接確認】【家族の協力を得ながら客観的に情報収集】【好発する急性疾患を見当】【急変のリスクを評価】【診察の

長期化を予測し緊急度を引き上げ】【家族の緊張を緩和しながら具体的に指導】の10カテゴリーを抽出した。【家族の緊張を緩和しながら具体的に指導】のカテゴリーでは、小児救急医療を受診する子どもの母親は不安の強い状態であることが多い。そのため、トリアージ看護師は、その不安や心配を抱えて受診していることを理解し、共感する態度で言葉をかけ、説明を加えることで寄り添い、安心できるように、そして、安寧に子どもを看ていられるように気を配っていた。また、看護師は、その対象患児が同じような状況に陥った際に、親が自宅に対応できるように、体感させることや、実際に子どもへ実施して見せることで、親を支援していた。トリアージ看護師は、緊急事態が想定され得るトリアージ中の時間的な制約のある状況においても、小児看護における家族への支援の必要性を見極め、緊張している家族の力量から最小限に指導し、トリアージの一部として、家族への支援を行っていることが示唆された。

第2章第2節、第3節では、第1節の小児救急場面における看護師のトリアージスキルの質的分析結果を基盤に全国の小児救急トリアージを実施している看護職を対象に質問紙調査を行い、尺度開発の手法を用いて小児救急トリアージスキルの認識の構造と看護実践の構造を明らかにした。小児救急トリアージスキルの認識は、第1因子【脱水を査定し情報収集】、第2因子【子どもの安楽促進】、第3因子【隔離不要の判断】の3因子15項目構造であった。小児救急トリアージスキルの看護実践は、第1因子【緊急度評価と子ども・親の安楽促進】、第2因子【脱水の査定】、第3因子【親への指導】、第4因子【子どもへの接触】の4因子19項目構造であった。

小児救急トリアージスキルに関する実践の構造と認識の構造を比較すると、認識構造第1因子【脱水を査定し情報収集】と実践構造第2因子【脱水の査定】、および認識構造第2因子【子どもの安楽促進】と実践構造第1因子【緊急度評価と子ども・家族の安楽促進】にはそれぞれ類似部分が多い。これらは看護師が小児救急トリアージで重要と認識しながら実践を伴っていることが考えられ、小児救急トリアージの根幹をなしていると捉えられる。したがって小児救急トリアージは子どもの安楽を追求しながら、生理学的特性である脱水をアセスメントした上で緊急度評価を行うことが重要であることが示唆される。一方、実践の構造のみに示された第3因子【親への指導】と第4因子【子どもへの接触】は、分析結果で解釈すると、トリアージ看護師が重要と認識していないが、実践の中で多く展開されていることになる。小児救急トリアージにおけるこれらの観点は、既存の小児看護学のテキストやトリアージ教育の中では特別着目されてはいないが、看護師が自分の経験則で家族の話を傾聴してトリアージする、家族へ指導したり、子どもに触れたりすることを無意識に重視して、トリアージの中で自然に実践していると考えられる。

第3章では、子育て支援の観点で小児救急および小児看護における子育て支援の内容と研究動向について、文献レビューを行った。小児救急医療のなかで特化した子育て支援は【電話相談】であったが、小児看護分野での子育て支援は、【乳児期以降の子どもの母親への医療機関の看護職の支援】、【子どもの有する問題に対応した親への支援】、【母親

の有する問題に対応した支援】、【医療機関以外での看護職の支援】、【看護職の子育て支援に関する課題】の論文が抽出され、さまざまな視点で子育て支援が実践され、子育て支援の必要性が述べられていた。これらの視点は小児救急医療の場で多用できると考えられる。小児救急医療を必要としている子どもの多くは、入院を必要としないケースが多いため、外来で実践できる子育て支援を明確化し、実践を積むことは小児救急医療の質向上にもつながると考えられる。小児救急医療においては生命の安全やトリアージなどが重要視されているが、緊急性の低い子どもが多いからこそ、子育て支援を機能として意識し、看護として定着する必要性を述べている。

第4章第1節では、小児医療における子育て支援促進モデルの検討の問題の所在と目的を述べている。

第2節では、小児救急医療での子育て支援の実態と子育て支援の充実に向けた展望を得るため、小児救急医療機関に所属する看護職を対象として、子育て支援に特化した業務内容、小児救急医療機関として実践・強化すべき子育て支援の内容、子育て支援部門・機関と小児救急医療部門・機関で連携している（すべき）内容についてインタビューし、その内容を質的に分析した。【親に個別で子どもの体調不良時のケアを対面説明】【トリアージスキルの項目を活用して親にケア方法を情報提供】【虐待と虐待リスクが気になる場合は院内で連携】【虐待や虐待リスクを想定する場合は地域や行政の専門機関と連携】

【親と保育者への院外出講による情報提供】【安心できる子育て支援策を具体的にイメージ】【電話相談で親とのつながりを考慮して対応】【子育て情報が記憶に残るように啓発】【救急外来の初期評価から情報の引き継ぎ】【親の立場に立ち育児を支持】の10テーマを抽出した。

第3節においては、子育て支援に関わる保育者の捉える小児救急医療での子育て支援についてあきらかにするために、保育者を対象として、小児救急医療で実践すべき子育て支援の内容、子育て支援部門・機関と小児救急部門・機関で連携している（すべき）内容についてインタビューし、その内容を質的に分析した。【親の安心を意識し医療機関で子どものケア・対処方法を説明】【生活に密着した場で医療従事者が育児や健康教育に参画】【視覚を刺激し持ち帰り可能な子育て支援情報を提供】【育児に奔走する親の状況を受容】【医療機関と他の専門機関のネットワークを構築】【虐待を発見】【トリアージスキルの因子・項目を活用して親を指導】【子どもの精神面を直接的に支援】の8テーマを抽出した。

第4節においては、看護職および保育者の調査から得られたこれらのテーマを統合し、また、第3章小児救急医療における子育て支援の動向に関する文献レビューを参考に、子育て支援促進モデル案を提案した。モデル案は、小児救急医療機関での子育て支援と地域にむけての子育て支援に分けられ、それを支える支援者の基本的姿勢が挙げられた。小児救急医療機関での子育て支援として、【意図的な親への接触】【子育て支援情報コーナーの設置】を、地域にむけての子育て支援は、【地域の機関と交流し活動に参画】が挙げら

れた。子育て支援の【基本的姿勢】として親に関わる際には、小児救急医療機関の内外を問わず、日常的な育児を後押しするような共感的なコミュニケーションで寄り添っていく必要性を見出した。今後、この子育て支援促進モデル案を活用し、アクションリサーチを用いて検証し改良していくことを課題としている。

〔2〕 審査結果の要旨

大阪総合保育大学課程博士審査基準に添い、本研究の評価を述べていく。

第一の研究業績を踏まえた集大成であると認められる点については、論者の看護師としての実践を起点とする問題意識をもとに、丹念な文献展望と多様なデータについて質的分析、量的分析を行い、小児救急トリアージスキルを明らかにし、さらに実装可能な子育て支援促進モデルを提案したことは評価に値する。

なお、本論文の各章は、以下の雑誌等（査読付き）に公刊されている。

序章 未発表

第1章 藤澤盛樹，石橋かず代，白坂真紀，川根伸夫，桑田弘美（2015）．看護師の小児救急トリアージスキルに関する文献検討．日本小児救急医学会雑誌，14（2），307.

第2章 藤澤盛樹，石橋かず代，白坂真紀，桑田弘美（2018）．小児救急トリアージ場面における看護師のトリアージスキル．日本小児救急医学会雑誌，17（1），2-10.
藤澤盛樹（2019）．小児救急トリアージにおける看護実践．大阪総合保育大学紀要，13，103-111.

第3章 Seiki Fujisawa（2020）．Literature Review on Childcare Support in Japanese Pediatric Emergency Care. *23rd East Asian Forum of Nursing Scholars Schedule Booklet*, 636.

藤澤盛樹（2020）．小児看護における子育て支援に関する文献レビュー ―小児救急医療における子育て支援への示唆―．大阪総合保育大学紀要，14，129-142.

第4章 未発表

終章 未発表

なお、第1章および第2章はJSPS 科学研究費（若手研究 B）15K20752 の助成を受け、第3章は、JSPS 科学研究費（基盤研究 C）18K10411 の助成を受けた。第4章については、JSPS 科学研究費（基盤研究 C）18K10411 の助成をうけ進行中の研究である。

第二の独創性については、小児看護においては、子育て支援の研究がされているが、小児救急トリアージ領域においては子育て支援の論文は電話相談についての先行論文があるだけである。小児救急医療では子どもの状態の緊急度を見極めるトリアージが普及し、トリアージの判定によって適切な医療が受けられるようになっている。先行調査で明らかにしたトリアージスキルには、子育て支援に活用できるスキルがあることを示し、小児救急医療におけるトリアージスキルを活用した子育て支援促進モデルの考案を提起したのは、論者だけである。このことは本研究が独創的であることを示している。

第三の申請論文の属する研究領域において、その水準の引き上げに資するものであることについては、小児救急医療分野で、子育て支援の先行研究が示されていないなかで、本研究は小児救急医療研究領域における子育て支援の方法論について、トリアージスキルと絡め視座を高めた。小児救急看護において、子育て支援、家族支援の観点からの実践が経験的になされていることを明らかにし、さらに、今後、この視点を現任の小児看護現任教育にも活かす必要性を、データに基づき提起したことは重要で、小児看護学の水準の引き上げに貢献すると確信する。

第四の学際性については、本研究は看護職だけではなく、保育者からもデータを収集し、小児救急医療における子育て支援促進モデルを提案した。このモデルは、看護の視点のみではなく、保育、子育ての現況を踏まえ、親のニーズに沿う子育て支援促進モデルであり、今後、地域で実施されている子育て支援プログラムと協働して、活用されていくと考える。小児救急医療における子育て支援の探求を、保育学・教育学と小児看護学・救急看護学の専門性を融合し、学際性を持つ研究として高い評価をあたえることができる。

第五の本学大学院が授与する博士（教育学）の学位にふさわしいと認められることについては、本研究は小児救急医療の分野から子育て支援、家族支援に活かせる知見を提案したが、これは保育学をはじめとする子育て支援、家族支援の研究、実践に新たな知見を加えることになり、保育学・教育学へも大きな寄与となる。よって、本学大学院が授与する博士（教育学）の学位にふさわしいと考える。

以下に、博士学位請求論文公開審査会において審査委員により出された質疑応答について主なものを記載する。

1. 小児救急トリアージスキルを子育て支援に活用することについての質疑応答

「小児救急医療を活かした子育て支援とは何か、保育・教育職が実践する子育て支援にどのように活用するのか。」の質問に対して、以下の回答を得た。

救急医療を受ける緊急度の高くない健康障害をもつ子ども、および、救急医療を受ける可能性のある地域で生活する子どもの親に対するトリアージスキルの因子・項目を活用した情報提供（具体的には、脱水や発熱に関連に関する項目で、その症状の見方、対処方法に関する情報提供や指導）、ならびに緊急性に関係なく子どもと親に真摯に関わる看護職としての姿勢（心構え・マインド）である。

2. 採用した方法論についての質疑応答

「質的研究は一般化をめざすものではないが、第2章の質的研究の対象は9名、第4章は看護職8名、保育職8名と比較的少ない対象である。また、質的研究では、当該テーマについての経験と知識、語れる能力が必要ではないか。」の質問に対して、以下の回答を得た。

第2章、第4章の質的研究は、研究対象である研究参加者（看護職・保育者）の子育て支援に対する考え、実践のその現象の語り、記述から丁寧に導くことが重要で、妥当と考えた。質的研究は、研究対象に分析結果が左右されるという点では、その語られるデータそのものが豊かでなければならないので、子育て支援に理解のある研究対象を選択的に依頼した。第2章のトリアージスキルに関しては、看護師の教育に活かす観点や実践を評価するものとして統計的な一般化、数値化したいと考えた。研究手法として、トリアージスキルが未知で明確になっていなかったのも、質的分析でその要素を明らかにし、その結果を基に尺度開発プロセスに従い、量的な分析を行った。

3. 救急医療における小児救急トリアージと子育て支援の実践についての質疑応答

（1）「第2章の小児救急トリアージにおける看護実践の構造で抽出された『緊急度評価と子ども・親の安楽促進因子』には、子どもの緊急性と親の訴える症状が合致しているのかという実践が含まれるのか。」についての質問に対して、以下の回答を得た。

当該因子には、<家族の訴えと症状の整合性を吟味する>という下位項目があり、また、同章の第1節の参加観察とインタビューの調査結果で、過剰になりがちな親の訴えを客観的に査定することや、一方で、親が深刻そうではない場合でも子どもの緊急度を客観的に吟味するという結果が、この下位項目の基となっており含まれているとの回答を得た。

（2）「救急医療を受ける子どもの多くは軽症だと言われているが、親は軽症と捉えて小児救急医療機関を利用しているわけではないので、その状況にある子どもと親に看護師はどのような育児支援をしていると考えられるか。」の質問に対して、以下の回答を得た。

吸入などの処置や点滴を行う場合、その処置中の時間を通し、ある程度時間をかけて関わっていた。しかし、診療後帰宅可能な多くの子どもの親に対し、その救急を受診後からしばらくの間、目安として翌朝くらいまでの対処に限定し、主訴・症状に合わせた症状緩和、水

分摂取の方法、家庭内の二次感染予防などの観点について、短時間で、かつ対面で親に説明しようと心がけていた。また、看護師が特に留意する親の状況として、表情が固い、質問が多いなどの場合は、診療後というタイミングで、親自身の不安解消を重視して積極的な接触を図り子育て支援のニーズを捉えて関わっていることも明らかになった。

以上、博士学位請求論文公開審査会において審査委員により出された質問にも的確に回答をした。本論文は小児救急医療におけるトリアージスキルを活用した子育て支援促進モデルの提案を行った。将来的にアクションリサーチを通してこのモデルの有用性を検証し、さらに内容を深めることが今後の課題である。子育て支援において、医療機関との融合は重要であり、今後の研究と実践に期待したい。子育て支援の重要性が高まっている現代社会において、本論文の研究が社会貢献に果たす役割は大きい。このような側面からも、本論文は高く評価される。

よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するにふさわしいものと論文審査委員全員一致で判断した。